

慈悲に聖道・浄土のかわりめあり。聖道の慈悲というのは、ものをあわれみ、かなしみ、はぐくむなり。しかれども、おもうがごとくたすけとぐること、きわめてありがたし。浄土の慈悲というのは、念仏して、いそぎ仏になりて、大慈大悲心をもって、おもうがごとく衆生を利益するをいうべきなり。今生に、いかに、いとおし不便とおもうとも、存知のごとくたすけがたければ、この慈悲始終なし。しかれば、念仏もうすのみぞ、すえとおりたる大慈悲心にてそうろうべきと云々

第4組 瑞雲寺住職

小泉 元瑞

text by Genzui Koizumi

## 第4章「仏の大慈大悲心」

### — 悪人のこの身に —

了祥師は『聞書』で、第一条～三条までを安心訓といわれます。本願がおこされた本意が悪人成仏のためである、という信の内容が明らかにされます。第四条～第十条までは起行訓と言われます。特に第四条は信心の行者の生活の相が、自利利他円満の行である念仏において具体化されているということです。

私たちは、慈悲に二種あるのではなく、聖道・浄土のかわりめがあると聞かされても、そこに段階や優劣をつけ、念仏だけで何も行じないのなら消極的ではないか、などと考えがちです。しかし、そもそも慈悲そのものに変わりがあるのではなく、慈悲に対する私たちの了解にかわりめがあるのでしょうか。凡夫も、時に慈悲の心を起こすことはあります。しかし迷情の凡夫は、縁によって関心が移り変わり、起こした慈悲の心も徹底できません。

文字通り聖の道を歩んで、菩提心に生きようとする聖道門の人々は、傍観者にならず、自ら慈悲を行じて、それを完遂しようと努力精進するのです。ところがその自力の行の成就には永劫を要し、それが真の救いとなるのか確証がありません。悲しいかな、そこに難修という問題があります。しかしながら、他を自力でたすけられると考えている限り、自分が思い描いていた前提は肯定されたままなのです。たすけることができると思っていた、その思いが挫折する

時、初めてたすからなければならないのはこの身であることが、課題となるの  
でしょう。

できないからと言って人間の慈悲の心や行動を否定しているのではありません。  
そこがかわりめなのです。念仏して、いそぎ仏になる道が開かれたという  
意味です。金子大榮先生は、「浄土を願う者は、すでに自他の業縁を悲しむ心  
がある…念仏もうす身には、深く如来の大慈大悲心が感ぜられている…大慈大  
悲の実現を、「仏になりて」と期するのである」（『歎異抄』岩波文庫）と教  
示されます。つまり宗祖にとって念仏申すことは、凡夫が個人の行として、念  
仏の功德を期待してたすかる、という意ではありません。仏の名告りの心を、  
その心のままに信受することであり、その背景に無数の念仏申してきた先達の  
歴史があるということです。諸仏の称名を「今日ただ今、いそぎ仏になるよう  
なあなたとなれ」と、教言として蒙り続ける身になるのでしょうか。したがって  
仏の自利利他の心は、出離の縁なき悪人の身の自覚として頂けるのです。小慈  
小悲もなく、名利に人師を好むようなわが身とは、大慈悲たる念仏の功德にお  
いて発見せられた事実です。「いそぎ」とは身は凡夫のままに、その心に仏の  
大悲心を領受したということです。悲とは、文字通り身を引き裂くような呻き、  
痛みの意です。曇鸞大師は、「若不生者 不取正覚」という悲心に与楽の意義  
を見出されました。つまり人間に、真の生きる喜び（救い）として与える深い  
心を、そこに見られたのでありましょう。「すべての人の救われる法において、  
自身は救われ、自身の救われる法を身証して、すべての人の救われる道は見開  
かれる」（前掲同）との指摘は、釈尊に恨みの言葉を投げかけた凡夫人韋提希  
が、仏言により「我今、極楽世界の阿弥陀仏の所に生まれんと樂う」（聖典九  
十三頁）と選捨し、やがて共に業縁を生きる、「未来世の一切衆生」の救いを  
願う往生人へと変革されていく、『観経』の教説を想起せしめられます。